

e-Learning による日本語教育の実践

—ゲーミング教材を活用した作文指導と日本語能力試験対策—

竹村 徳倫*・小原 裕二**

要 約

本研究では情報文化学科の留学生 13 名を対象に、日本の大学で学ぶ留学生が直面する可能性の高い日本語による文章作成能力向上とコミュニケーションのための日本語能力の獲得を主眼とした日本語クラスを実施した。文章作成能力のためのクラスでは、従来のパターン型の文章作成指導ではなく、問題解決の縦糸・横糸モデルを用いたゲーミング教材を利用し、留学生が直面するであろう様々なレポート課題に対応できる能力を育成することを企図した授業を行った。他方、コミュニケーションのためのクラスでは日本語能力試験合格のための文法、読解クラスなどを実施。聴解テストに関しては、エドクラテス上に e-Learning 教材をアップロードし、多忙な学生がいつでも利用可能な環境の構築を行った。その結果、文章作成能力指導クラスでは今後同様の日本語文書作成支援を行う上での示唆を得ることができ、日本語能力試験対策に関しては、N2 レベル以上の合格者を輩出することができた。

キーワード：問題解決力、縦糸・横糸モデル、高等教育、文章産出過程モデル、アカデミックライティング

1 背 景

日本学生支援機構（2016）によると日本への留学生数は平成 28 年 5 月時点 239,287 人であり増加傾向にある。留学生に対する日本語教育では大学入学までは語彙、文法学習が主に行われているが、大学入学後はレポートなどのための日本語で文章を書く力が必要となる。他方、アルバイトなどでは日常生活のための日本語も必要であり、卒業後に日本で就職するのであれば、コミュニケーションのための日本語能力の獲得が必要となる。

日本語教育における作文指導では、大学入学希望者の日本語能力レベルを判定する「日本留学試験」の「記述問題」課題が重視されているが、同試験は異なる二つの意見を読んで自分の意見を述

べるといったように出題形式のパターンがある程度決まっているため、そのパターンに合わせた文章の書き方を覚えるといった学習方法をとることが可能である。しかし、留学生は大学入学後レポートなど日本語によるさまざまな文書作成課題が課せられるようになるため、大学入学前に身につけたパターン型の文章作成法では、大学入学後の文章作成に対処できないという問題がある（村上ら 2003, 村上 2005）。他方、卒業後に日本で就職を希望する学生は、コミュニケーションのための日本語能力が必要であり、就職活動を有利に進めるためには、資格として日本語能力試験に合格する必要もあるため、大学入学後も日本語学習を継続しなければならないという現状がある。

2 日本語能力において必要となる対応

上記のような背景から、情報文化学科の 1 年生の留学生を対象に、日本語クラスを実施した（図 1）。

2017 年 11 月 30 日受付

* 江戸川大学 情報文化学科非常勤講師 日本語教育

** 江戸川大学 情報文化学科助教 教育工学



図1 日本語クラスの授業風景

クラスでは、前述の留学生を取り巻く事情を考慮し、文章作成と日本語能力試験対策を実施した。対象となった学生は1年生の13名で、国籍はベトナム、中国、ミャンマー、フィリピン、ネパールとさまざまである。また日本語学習歴に関しては、全員が国内の日本語教育機関で1年半から2年程度日本語の学習歴を有している。

クラスの年間予定に関しては、1年生でも学部の特設科目ではすぐにレポートなどが課せられるようになることと日本語能力試験が12月の第1日曜日に実施される点を考慮し、2017年4月から前期終了までは文章作成指導を、後期は日本語能力試験対策を主に実施した。また、夏期休暇中は、日本語能力試験対策を視野に日本語初級文法

について集中講義も併せて実施した(図2)。

なお、授業は毎週水曜日の1時限に実施した。以下、実践内容について詳細を述べる。

3 文章作成指導と問題解決を用いたゲーミング教材

前期の文章作成の授業のスケジュールについては、4月中は留学生の日本語能力把握のための準備をしたうえで5月の連休明けから6月半ばまではアカデミックライティングの基礎となる技能や文法・語彙知識などの導入を行い、6月からはゲーミング教材を用い実際の文章作成指導を行った。

アカデミックライティングの基礎に関するクラスでは、大学レベルの日本語文章作成に必要な知識について、主に学生が触れたことがないと考えられるものについて実施した。具体的には『小論文への12のステップ』の第2章と3章などを用い、文章の種類と文体、話し言葉と書き言葉など、学生が国内の日本語学校で触れる機会の多くない文章作成のための知識について学んだ。また同時にレポート作成で必要となる日本語によるタイピングの技術についても指導を行った。

後半に実施した実際の文章作成指導では、実際の文章の書き方についての指導を行ったが、従来のパターン型指導の問題の改善のためには、因ほか(2007)や因ほか(2008)が提唱する文章作成のためのスキーマの獲得が重要であるという考えから、今回の日本語クラスでは松田(2016)の問題解決の縦糸・横糸モデルを基に作成した竹村・松田(2017)の日本語作文教育用ゲーミング教材を使用した。

このゲーミング教材はHayes & Flower(1980)の文章産出過程モデルに基づいて作成されており、同モデルに従い「読む人」「トピック」「文章作成の必要性」という3つの条件について学生に考えさせながら、問題解決のモデルに添って文章を考えていく形式で進行していく。クラス内で使用したゲーミング教材では実際の情報処理の科目でレポートが出題されたという状況で作文課題を与え、レポートのために必要な文章がどのようなものの

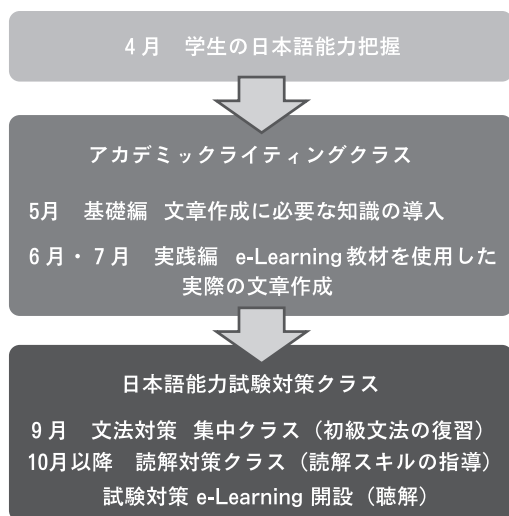


図2 クラスの年間予定

か考えさせながら文章作成に必要な知識を明示的に教える構成となっている（図3～6）。

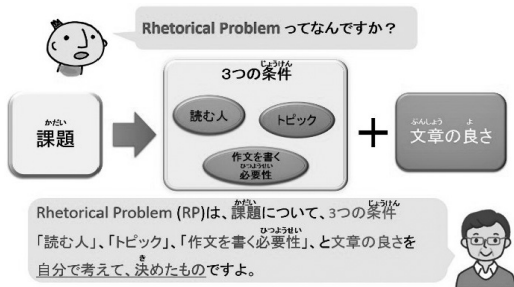


図3 日本語クラスで使用した作文 e-Learning 教材

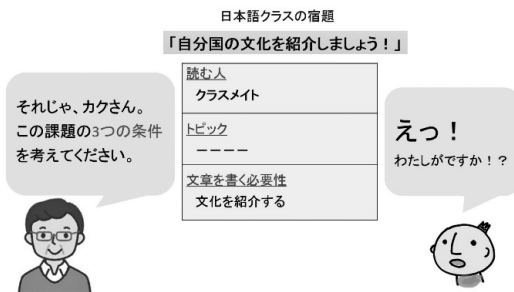


図4

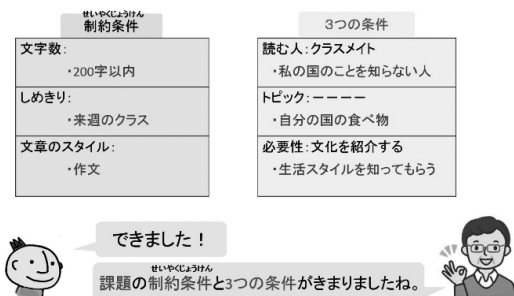


図5

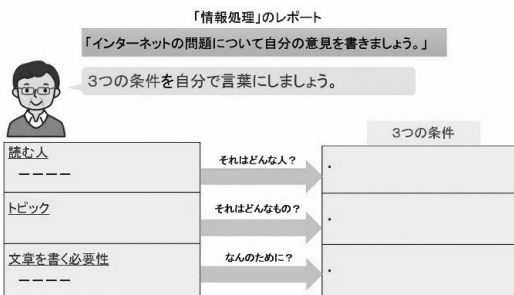


図6

実際の授業では、教材を使用するために必要事項を確認したうえで前半のライティングの基礎クラスで学んだことなどを参考に、ゲーミング教材を使用し、学習者に文章作成をしてもらった（図7）。今回使用したゲーミング教材は文章を書く上での目標設定について重点を置いた構成となっており、サンプルのレポートを提示し、課題が出された状況から文字数、しめきり、文章のスタイルなどの制約条件を確認しながら、先述の3つの条件について考えるという作業を進める。



図7 ゲーミング教材の使用風景

例えば情報処理クラスのレポートで「インターネットの問題点について書きましょう」という課題であれば、必要な文章のスタイルはレポートなので文体や語彙もそれに合わせなければならないことや、読み手は担当の教師であること、またトピックは単にインターネットについて書けばいいわけではなく、情報処理課題に適合するトピックを選択しなければならないことを確認するような仕様となっている。

上記のような指導を行った結果、それまでの作文では初級日本語の特徴である、です・ます体で文章を書いていた学生や留学試験の記述のパターンでの作文をしていた学生も、レポート課題に合わせて文体、語彙を使用するという意識をもつことができるようになるなどの効果が見られた。

4 日本語能力試験対策と試験対策 e-learning 開設

前期終了後からは12月の日本語能力試験に向けた日本語クラスを実施した。多くの学生が日本

語能力試験 N2 レベルを受験することから、補修クラスの主な対象は N2 レベル（中級レベル）とし、初級日本語文法の復習および能力試験で出題される各形式の試験問題への習熟を目的に授業を行った。以下、各クラスで実施した内容について述べる。

・文法クラス

文法クラスは9月に集中授業として実施した。内容としては、中級レベルの勉強をするために必要な初級文法の復習を主に扱った。扱った初級の文法項目は表1のとおりである。

表1 クラスで扱った主な文法項目

- ・受身（無生物主語を含む）
- ・使役、使役受身
- ・助詞・「は」「が」
- ・こ、そ、あ
- ・条件
 - ～と、～ば、～たら
 - ～ていく、～てくる
- ・名詞修飾
- ・複文
- ・可能表現
- ・授受表現

・読解クラス

日本語能力試験の N2 レベルでは長短さまざまな文章題が出題されるため、長文読解のスキルを獲得することが重要になる。しかし、初級レベルの学習では長文を読むことが少ないため、学生の中にはまとまった長さの日本語の文章を読むのがはじめてだという学生もみられた。そこで、クラスでは実際の日本語能力試験の読解問題と同形式の問題を用い、長文読解のために必要なスキルについての練習を行った。

具体的には、日本語の文章を読んだ経験の少ない学生は、文章を最初から一つひとつ読み進もうとする傾向があるため、2分間でどこまで読めたかを確認し、文章の大意をできるだけ正確に読み取る練習を行った。その結果、個人差はあるものの当初は2分間で2,3行、文字数で80~100字程度しか読めなかった学生が、練習を繰り返すことによって600字程度まで読むことができるよう

になった。併せて、作文の時間に学習した接続詞など、読解の手助けとなる語の紹介なども行い、これらを使って文章を読む練習を行った。

・e-Learning サイトの開設（聴解問題対策）

大学での勉強以外にも生活のためにアルバイトをしなければいけない留学生は多忙であるため、学習時間を確保するのが難しいという問題点があった。また日本語能力試験対策についても、問題をやりながら随時教師の解説を挟むことができる読解や文法などに対して、聴解問題はその特性上、授業で扱うのが難しいという問題があった。学生からはかねてから日本語能力試験の問題を家でやりたいという声が聞かれていたこともあって、その要望に応える形でエドクラテス上に日本語能力試験対策問題サイトを開設した（図8, 9）。



図8 エドクラテス上に設けた日本語能力試験対策



図9 エドクラテス上の日本語能力試験聴解問題

日本語能力試験対策用の e-Learning サイト開設に当たっては、まずこれまでも需要があったが授業内で扱うことの難しかった聴解問題のためのサイトを開設した。対象とするレベルは N2 レベル及び N1 レベルで、学生は自分の苦手な部分について自由に音源を確認できる仕様になっている。

現時点ではまだ聴解問題だけであるが、今後はそれ以外の読解や文字語彙の問題についても開設していく予定である。

5 これまでの成果について

以上、2017 年度に実施した情報文化学科における日本語クラスについて述べてきたが、現時点で認められた成果としては以下のようなものが挙げられる。まず、ライティングに関しては、先述のようにパターン型の文章作成指導を受けてきた学生に対しても、ある程度の効果が見られただけでなく、これまで日本語での作文をあまり経験してこなかった学生に対しても文体や語彙の使用に改善が見られたことが挙げられる。また、日本語能力試験対策に関しては、後期対策クラスについての検証はこれから行う予定であるが、参加者の中からすでに 7 月の日本語能力試験で N2 合格者が 1 名、12 月の試験で N1 合格者 1 名、N2 合格者 4 名出たことを付記しておく。

6 まとめと今後の課題

今期実施した日本語クラスはいくつかの新しい試みを行ってきたがここではその反省点と展望について述べる。今期ははじめてアカデミックライティングについての授業を実施したが、これまでの日本語教育では、十分な日本語能力を持つ留学生であっても、実際に大学レベルの文章を書く段階になると、何を書いていいのかわからなくなり、せっかくの日本語能力を発揮できずに終わってしまうということがよく見られた。また日本語教員側も専門分野の内容となると従来のパターン型の指導法では対応できなくなってしまうため、効果的な指導に結び付けることができないというジレ

ンマがあった。今回作文の e-Learning 教材を導入したことによって、学生が直面している文章作成の課題に自分で対応できるような仕組みを提示できたことは大きな成果であると思われる。今後の計画としては、今期は作文の目標設定だけにとどまった教材を文章作成と結びつけることを検討中である。今はまだ試行錯誤の段階であるが、この手法を進化させることで次年度以降の留学生の支援を継続的にやっていくことができるとと思われる。

また、日本語能力試験対策に関しては、大学の授業や生活のためのアルバイトなどに多忙を極める留学生が少しでも日本語を勉強する機会を提供するために e-Learning サイトを開設できたことは大きな進歩であると考えられる。日本語能力試験の N1 レベルに合格することは日本で就職することを考える留学生には避けて通れない資格なので、学生には継続的に日本語を学習できる機会を提供していければと考える。今後の計画としては、聴解だけであったコンテンツを読解、文字語彙と拡張することと、学生が継続的に利用をしてくれるような工夫を考えることが挙げられる。具体的には問題を自動採点するだけではなく、フィードバックも与えられるような工夫を講じる予定である。

今後も継続的に学生からのフィードバックを得ることで、教材のさらなる改善へとつなげていきたいと考えている。

参考文献

- Hayes, J. and Flower, L. (1980) Identifying the organization of writing processes. In Gregg, L. and Steinberg, E. (Eds.) Cognitive processes in writing: An interdisciplinary approach, 3-30.
- 日本学生支援機構 (2016) 「平成 28 年度外国人留学生 在籍状況調査結果」, http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/documents/data14.pdf
- 竹村徳倫・松田稔樹 (2015), 「問題解決の枠組みに基づく日本語学習支援のモデル」, 『日本シミュレーション & ゲーミング学会全国大会報告集』, 2015 年秋号, 84-87.
- 因京子・村岡貴子・米田由喜代・仁科喜久子・深尾百合子・大谷晋也 (2007), 「日本語専門文書作成支援の方向——理系専門日本語教育の観点から——」,

- 『専門日本語教育研究』, 9, 55-60.
- 因京子・村岡貴子・仁科喜久子・米田由喜代 (2008), 「日本語専門テキスト分析タスクの論文構造スキーマ形成誘導効果」, 『専門日本語教育研究』, 10, 29-34.
- 松田稔樹 (2016), 「縦糸・横糸モデルに基づくカリキュラム設計方法論構築の試み — SIG-10 活動の間まとめに向けて —」, 『日本教育工学会研究会報告集』JSET16-3, 83-90.
- 村上京子・小室輝代・三谷閑子 (2003), 「日本留学試験における採点基準の見直し」, 『名古屋大学日本語・日本文化論集』, (11), 107-124.
- 村上京子 (2005), 「作文評価における分の種類の影響 — 意見文と説明文の比較 —」。